

## 第4回みどりの食料システム戦略に係る意見交換会 (生産者（施設園芸・花き）)

日時：令和3年1月28日（木）15:30～17:00

場所：オンライン開催

参加者：別紙参照

### 【先方コメント概要】

- 次の世代が農業を営む際の地球環境を少しでも良い状態で保てるようにしなくてはならない。
- 施設栽培では、冬季の暖房で化石燃料を燃焼させてCO<sub>2</sub>を発生させている。吸収側である農業での発生を減らしつつ、社会全体でバランスをとっていくことが大事。排出権といった社会的な仕組みがあってもよいかと思う。
- 率直には難しいと感じたが、国民としては当然進むべき道。戦略に基づいた対策を個人の経営でどこまで受け止められるかの不安が大きい。人的、技術的、予算的支援を検討いただきたい。
- ネオニコチノイド系農薬のミツバチへの影響は明らかになっているため、農薬の使用低減にしっかり取り組んでいきたい。
- 自らが行動を起こさなければならないと再認識。まずは、自分たちができることを、少しずつやっていくことが大切。
- 将来的には、日本がゼロエミッションでの施設栽培という形で、リーダーシップを発揮できるようになるのではないか。
- 化学農薬・化学肥料のさらなる削減を図るためには、様々な作物で利用可能な天敵など、新たな技術開発が不可欠。
- CO<sub>2</sub>については、地域のごみ焼却炉からのCO<sub>2</sub>回収を進め、農業用への利用を進める政策をお願いしたい。
- 注意深く行っていけば非常に良い施策となる。化学農薬をさら

に減らすためには、初期防除、初期発見が重要であり、見回りロボットや病害虫発見システムがあると良い。

- 有機農業の面積拡大は消費者からの力も必要だが、25%への拡大というのは不可能ではない印象。
- 化学農薬は、栽培環境条件を整えることとドローンのスポット防除等を組み合わせれば50%削減は難しくないという印象。
- 化学農薬の削減のためには、耐性品種、天敵、バイオスティミュラントといった技術開発が必要。
- 生産者それぞれで基準が違うため、目標の定量的な評価は難しい。天敵の開発や育種は世界的に遅れている印象。
- 天敵や紫外線の活用のほか病害抵抗性品種もあると、化学農薬の50%削減は可能。
- 台風により農薬での防除が必要となることもあるため、イチゴ栽培では有機栽培拡大のハードルは高い。
- 化学肥料は4割程度削減できており、地下部のリアルタイムモニタリングが可能になれば、さらに肥料の削減が見込まれる。
- 行政側には、通信環境に関わっていただきたい。農村部でも通信機器が使えるようなインフラ整備が重要。
- 農業を持続化させるために、何らかの付加価値として認めてもらえる仕組み、評価があれば良い。
- 技術を活かせる生産設備等は必要だが、ルールを決めて動くためには、ある程度の規模感がないと実効性に欠けるのではない  
か。

(以上)

(別紙)

第4回みどりの食料システム戦略に係る意見交換会  
(生産者(施設園芸・花き))  
出席者一覧

(株) 宮城フラワーパートナーズ  
今野<sup>こんの</sup> 高<sup>たかし</sup> 代表取締役

ベルファーム(株)  
岡田<sup>おかだ</sup> 典久<sup>のりひさ</sup> 代表取締役社長

JA 西三河きゅうり部会  
下村<sup>しもむら</sup> 堅二<sup>けんじ</sup> 改革プロジェクトサブリーダー

JA 阿蘇いちご部会  
大津<sup>おおつ</sup> 裕樹<sup>ひろき</sup> 会長

JA そおピーマン鹿児島ピーマン専門部会環境制御研究会  
梅沢<sup>うめざわ</sup> 健太<sup>けんた</sup> 会長